

## 高等学校における「聞くこと」の学習指導の研究 —「聞くこと」の有用性を明らかにして思考力を伸ばすために—

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程 研究生 神田恵美子

(埼玉県立栗橋北彩高等学校教諭)

### 1、本論文の目的

日常生活においても、学校生活においても、言語生活の中で基礎となるのは「話すこと・聞くこと」の中の「聞くこと」である。「話すこと・聞くこと」の活動は、表裏一体のものではあるが、まずは聞く力が身に付かないと、場面に応じた話す力は身に付いてこない。学習指導要領で、「話すこと・聞くこと」の指導目標が明記されているが、「聞くこと」は自然に身に付くものであり、取り立てて指導するものではないという考えがあり、特に高等学校では、「聞くこと」の能力を伸ばす授業が活発に行われることが殆どない。

そうした状況を改善するために、「聞くこと」の有用性を明らかにし、「聞くこと」の学習を活性化させる必要がある。「『聞くこと』を『話すこと』から独立させて考えることで、能動的に『聞くこと』が重要であり、『聞くこと』の能力育成が思考力の向上に繋がるという面を顕在化させることができる」という仮説を立て授業実践を通して考察した。

また、本研究の目的は、国語科における「聞くこと」の学習の捉えられ方、研究者の主張、教育現場の実態を踏まえ、特に「聞くこと」の能力を向上させるための授業を開発することである。その方策として次の三つを挙げた。

- ①「聞くこと」の指導に関する実態と問題点を明らかにする。
- ②「聞くこと」の学習の捉えられ方、研究者の主張を整理する。
- ③学習者の「聞くこと」の能力を育成する授業を開発する。

平成 30(2018)年告示の学習指導要領において、国語の科目が改編され、論述の他に討議、話し合い等の表現活動が重視されている。改訂の特徴として生きて働く「知識・技能」の習得と論理的な思考力の育成があげられる。必履修科目の「現代の国語」の「内容」には「論理の展開を予想しながら聞き、話の内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価するとともに、聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること」という文言がある。

筆者は予想しながら相手の話を聞き、自分の理解を深めるという学習が重要であると考える。ただ漫然と聞く場合と、意識して聞く場合とでは、その理解度が違う。さらに、予測しながら聞くのと、聞いてから理解するのも理解度が違う。頭の中でじっくり振り返りながら聞くのでは、理解が追い付かないことも多い。予測しつつ聞き、間違っていたらすぐ修正を加えながら聞き進めることが大事である。これを柱として本論文を進める。

## 2、本論文の構成

### 序章 研究の目的と構成

#### 第1節 研究の目的と意義

#### 第2節 研究の方法と構成

### 第I部 高等学校における「聞くこと」の学習の現状と問題点

#### 第1章 「聞くこと」はどのように捉えられてきたのか

##### 第1節 「聞くこと」の捉えられ方の実態

##### 第2節 「聞くこと」を独立的に捉える意義とそれを裏付ける主張

#### 第2章 「聞くこと」の学習が顧みられない現状

##### 第1節 音声言語に関するアンケート結果から見える「聞くこと」の扱い

##### 第2節 「聞くこと」の学習が顧みられていない実態の検証

### 第II部 「聞くこと」の能力を測るテストの作成

#### 第3章 「聞くこと」の能力を問うテストとその評価法の検討

##### 第1節 実施されている「聞くこと」のテストの検討

##### 第2節 先行研究のリスニングテスト実施結果と考察

#### 第4章 「聞くこと」の能力の分類と分類表の作成

##### 第1節 「推測・確認・修正」しながら「聞くこと」

##### 第2節 「聞くこと」により理解すること

##### 第3節 「聞くこと」の能力分類表の作成

#### 第5章 「聞くこと」の能力を問うリスニング評価テストの作成

##### 第1節 高等学校国語リスニング評価テスト問題作成

##### 第2節 リスニング評価テストの結果の分析と個人票

##### 第3節 リスニング評価テストの考察

### 第III部 思考力を深め社会に出てから役立つ「聞くこと」の能力を高めるための授業実践

#### 第6章 「聞くこと」の3年間を通しての年間計画

##### 第1節 「聞くこと」に関する生徒の意識

##### 第2節 3年間の「聞くこと」の指導計画表

#### 第7章 国語科における「聞くこと」の能力を高めるための授業実践

##### 第1節 能動的に「聞くこと」の能力を高める授業実践

##### 第2節 「聞くこと」の能力を高めることで思考力を向上させる授業実践

##### 第3節 授業実践の考察と今後の課題

#### 第8章 国語の授業以外での「聞くこと」の学習

##### 第1節 他教科や講演会等における「聞くこと」の学習

##### 第2節 「総合的な学習の時間」における「聞くこと」の学習

##### 第3節 国語の授業以外での「聞くこと」の考察

## 終章 研究の総括と今後の課題

### 第1節 研究の総括

### 第2節 研究の成果

### 第3節 本研究の課題と展望

## 3、各章の概要

本論文はⅢ部構成としてまとめた。第Ⅰ部では、まず、「聞くこと」の有用性を顕在化させるための仮説を立てた。そのあと、「聞くこと」の学習が顧みられないという問題点と現状について、先行研究やアンケート結果を踏まえながら述べた。続く第Ⅱ部では、「聞くこと」の能力表を作成し、国語リスニング評価テストの評価方法を考察したうえで実践方法を考えた。第Ⅲ部は、第Ⅱ部を踏まえて、第Ⅰ部で立てた「聞くこと」の有用性に関する仮説を検証するための授業実践編とした。高等学校において「聞くこと」の能力を向上させるために3年間を見通した授業計画を立て、国語リスニング評価テストと並行して、「聞くこと」に関する取り立て指導を行った。また、国語科以外の教科や学校行事において、国語の授業で身に付けた「聞くこと」の知識・技能をどのように定着させていくかを考えた。以下各章ごとの説明を加える。

第Ⅰ部の第1章第1節では、「聞くこと」の能力向上が「話すこと」「読むこと」「書くこと」の能力を向上させることより軽んじられている点を問題視した。音声言語の中でも「聞くこと」の指導に関する問題点を整理し、次の三つをあげた。

- ① 「話すこと・聞くこと」と一括りにされ、「聞くこと」は独立して捉えられていない。
- ② 国語科教員が、「聞くこと」の学習を指導する知識や技術を持っていない。
- ③ 大学入試に「聞くこと」に関するテストが存在しない。

まず、これらの問題点について考察した。その上で「聞くこと」はどのように捉えられてきたのかを見るために、「聞くこと」を独立的に捉える意義とそれを裏付ける主張を整理した。そこで、「聞くこと」の独立性を重んじる主張として田中智生(2004)の考えを取り上げた。田中は、「聞くことの学習指導を話すことの学習指導といったん切り離して取り組むものである」としている。

第2節では、『聞くこと』を『話すこと』から独立させて考えることで、能動的に『聞くこと』が重要であり、『聞くこと』の能力育成が思考力の向上に繋がることを顕在化させることができる」という仮説を立てた。この仮説を裏付けるための主張を「①能動的に『聞くこと』が重要であるという主張」と「②『聞くこと』の能力を向上させることが思考力の育成に繋がるという主張」とに分けて年代の古い順に整理し相互の説の関わりを見ていった。

「①能動的に『聞くこと』が重要であるとする主張」として、大村はま(1968)・高橋俊三(1993)・前田真証(2004)・益地憲一(2018)の主張を取り上げた。大村は、「聞くこと」なしの学習活動・授業は成立しないと考え、「聞いていなければ実害がある」という学習を

設定し、積極的に自ら聞く態度や力をつけるために様々な工夫を積み重ねていった。高橋は「聞き手にとって重要なものを選んだり、質問したりすることは、話を真剣に受けとめようとする誠実な態度である」とし、主導的に聞くことが大事であると述べている。前田は、まさに積極的に相手に働きかけ、相手の言わんとしていることを自分から掴み取って理解しようという態度を育てることが大事と述べている。発達段階に応じて「正しく聞くこと」から「深く聞くこと」、さらに発言の可能性を見抜く「創造して聞く力」へと目標を上げていることは、高橋や大村にも共通する。益地は、「聞くこと」は受動的な行為や能力ではないとし、話を次につなぐ能動的な機能があると述べている。

「②『聞くこと』の能力を向上させることが思考力の育成に繋がるという主張」として、大村はま・増田信一(1994)・高橋俊三・山元悦子(2004)・若木常佳(2011)の主張を整理した。大村は能動的に聞く力をつけることは、理解する能力を高めることに繋がるとしている。話し合いの中で、様々な意見を聞いて、これと思うものを根拠をもって確実に選ぶ過程は、理解する過程であると述べている。増田は、「音声言語を生成していく過程を明らかにしてどの段階でどういう指導が必要なのか考えること」が重要とし、「思考生成」の過程の指導が従来の音声言語教育には欠落していたことを指摘している。「聞くこと」においても、「思考生成」が重要となり、「論理が正しいか検討していくという心構えが必要」となると述べている。

高橋は、「聞いた内容を整理し、受容すべきか否かを決定するなどの内言をも含めて考えるべき」と述べている。そして、「何をどのように判断して聞くか」ということも音声言語の能力としている。

山元は、増田や高橋より具体的に「聞くこと」が理解することであることをモデル化して示した。「聞くこと」は、相手の話の意図を積極的に汲み取っていく作業とし、「聞くこと」の能力を「理解する能力」とし、分析している。

若木は、高橋、山元の「聞くこと」の能力表などを参考にし、「対話指導における力の分析表」を「聞くこと」「対話」「話すこと」に区分した。この区分に関しては、大村、前田と共通している。また、増田信一の「思考生成過程」を踏まえて、思考過程、認知過程の重要性を述べている。ここで、認知過程とは情報処理過程であるとしている。

ここにあげた主張をもとに、仮説「『聞くこと』を『話すこと』から独立させて考えることにより、能動的に『聞くこと』が重要であり、『聞くこと』の能力を向上させることが思考力の育成に繋がるという面を顕在化できる」の内容を検証した。この仮説に関して、第5章の国語リスニング評価テストの実践や第7章の「聞くこと」に関する授業実践を通して考察していった。

第2章第1節では、国語科教室の実態を把握するために、1995年と2013年に行った「話すこと・聞くこと」(音声言語)指導に関するアンケート結果から分かることを比較・分析した。この約20年の間に教員の意識が変化したことが読み取れる。「話すこと・聞くこと」を授業で取り立てて指導する必要がないとする割合がやや増え、実際に取り組んでいる割

合が減少している。「話すこと・聞くこと」の音声言語学習に取り組みにくい要因については、「取り上げる範囲や到達目標が明確でない」「指導方法が確立していない」「評価・評定の仕方が難しい」が、2度のアンケートとも上位となっており、2013年は「受験科目にない」という割合がかなり高くなっている。また、「聞くこと」に関する学習に取り組むたいとする割合が半減している。

第2節では、第1節のアンケート結果と関連させて高等学校における「聞くこと」の指導の実態を検証した。次に、音声言語教育に関係の深い科目である「国語表現」と「現代語」の指導の実態について考察をした。笠原美保子(2006)の述べた「現場の教員の不評」、井上尚美(2007)が指摘した「教師の指導経験不足」が、「話すこと・聞くこと」の教育活動が広がっていかない原因と考えられる。出版された「現代語」「国語表現」等の教科書が国語教室の現場において十分活用されなかったことも、筆者と笠原の両アンケートから伺える。こうした教員の経験不足と開設当時適切な「現代語」「国語表現」の教科書が存在しなかったことにより、「聞くこと」の指導が十分に行われなかったと言える。「現代語」に関しては、開設する学校も少なく、学習指導要領の一期限りで姿を消してしまった。

第Ⅱ部第3章第1節では、「聞く力」を問う先行研究「2001年度・2003年度国立教育政策研究所学力テスト」「国語科聞く力の評価と指導 すぐに使える評価テスト」「母語話者のためのリスニング教材集」「日本語検定」「ビジネス日本語能力テスト」を考察し、どのような能力をはかるために、どのようなテストが行われているのかを整理した。

それぞれのテストにおいて「聞くこと」の能力の分析方法や、受験者の「聞くこと」の能力の測定の仕方を考察した。これらのテストの評価方法を見ると、大きく「問題の重要度によって配点を変え、正答率を算出しているもの」と「正答数÷問題数で算出した正答率で合否や成績、学習指導要領の正当性を判断しているもの」に分けることができた。

第2節では、「国語科聞く力の評価と指導 すぐに使える評価テスト」「母語話者のためのリスニング教材集」を実施した結果から、高校生に対してどのようなテストを行えばよいか検証した。まず、先行研究と同様に問題を見てよい場合と、問題を見ないで解く場合の両方を織り交ぜて実施した。次に選択肢問題か記述問題かということに関しては、選択肢の方が正答率が高いということを踏まえ、実際高校生に行うテストは選択肢問題と記述問題両方を出題した。さらに単純に正しく聞くことを問う問題か、聞き取った内容を頭の中で統合して正解を導く問題かによっても大きく正答率は変わってくる。こちらも両方を織り交ぜて実施した。メモの取り方の工夫も学ばせたいため、高校生を対象としたリスニングテストを実際行う場合は、メモを取る可の問題とした。単純に聞くだけでなく、思考力を駆使する聞き方を必要とする問題も取り入れた。

第4章では、まず「聞くこと」の能力を細分化し、先行研究を参考にして「『聞くこと』の能力分類表」を作成した。その際、桑原隆(1992)の「言語・言語活動・言語生活」と桑原の紹介するホール・ランゲージ理論を参考にし、「聞くこと」を大きく推測・確認・修正の三つの項目に分類した。また発達段階に応じて1年から3年まで段階に分け、「聞くこと」

の能力を細分化した。

第5章は実践編として「国語のリスニング評価テスト」を作成し、実施した。また、リスニング評価テストの分析方法を明確にし、クラス全体、そして個人において不足している「聞くこと」に関する能力を把握できるようにした。

第Ⅲ部は「聞くこと」の能力を高めるための実践編である。第6章では、第4章の「『聞くこと』の能力分類表」と照らし合わせて「聞くこと」の3年間の学習計画を作成した。

第7章では、第1章で立てた「『聞くこと』を『話すこと』から独立させて考えることで、能動的に『聞くこと』が重要であり、『聞くこと』の能力育成が思考力の向上に繋がることを顕在化させることができる」という仮説を、実践を通して検証した。「話すこと」と「聞くこと」は両方の言語活動が絡み合ってくるが、本論文では、そのなかでも「聞くこと」を中心とした取り立て指導を実践し、その内容をまとめた。

取り立て指導の柱として「能動的に『聞くこと』の能力を身に付ける学習」と、「『聞くこと』によって思考力を深める学習」の二つがあげられる。まず、前者として行ったものをあげる。

一つ目は、「一つの質問からインタビューする演習」（1年4月）である。これはインタビューをする際、相手の話をしっかりと聞き、その聞いた内容から次の質問を引き出すことができるというルールでおこなった。ある程度相手の答えを予測しつつ、質問を投げかけ、予測との齟齬を修正しながら次の質問を考えていく。また、教室を出て先生方にインタビューをする活動は「聞き書き」の学習となった。入学直後に実施し、クラス開きにつながるものとなった。高橋の説く「聞き合う（相互的に聞く機能）」「聞き分ける（論理的に聞く機能）」能力を向上させるという取り組みである。

二つ目は、「聞いた情報を的確に人に伝える学習」（1年5月）である。この学習は、情報を正確に聞き、その情報を他者に分かりやすく伝えるという活動である。最初に全体像を告げ、その後詳細を述べていくなど、情報を伝える工夫を整理していく。これもまさに予想しながら頭に状況を思い描き、確認し、修正していくことが必要となる。実生活では電車の遅延や防災関係の放送など、聞いていなければ支障が生じることもあり、大村はまの説く「聞いていなければ実害がある」という意識を持って学習に臨ませた。

三つ目は、「『言葉遣い帳』を使った待遇表現の学習」（1年7月）である。これは生徒から要望が多かった、敬語表現を身に付ける授業である。普段の言葉遣いを意識し、改善するために「言葉遣い帳」を一定期間つけ、自分の言葉遣い、他の人の言葉遣いの気になるところをあげ、伝え合うという学習である。町田守弘(2001)の説く「敬語意識を高めるための指導」と「的確な敬語表現ができるようにするための指導」両面を意識して実践を行った。また、待遇表現については、蒲谷宏(2013)の「待遇」についての考えを基盤とした。

四つ目は、「一つの質問から行う面接演習」（3年4月）である。これは、一つ目の「一つの質問からインタビューする演習」と同じルールで行われる。面接官、面接を受ける人、記録者という三つの役でロールプレイングを行い、面接官役の生徒は、面接を受ける人の

答えの中から次の質問を引き出すというものである。この実践では、大村はまの「たずねることの準備」として、「考え方について、だいたいを予想してみる」「よく聞いて、発展させるように次の話題を出す」という考えを取り入れた。予想しながら聞くという心構えを常に持って学習に臨ませた。

五つ目は、「待遇表現に留意した電話応対演習」（3年7月・9月）である。これも面接演習と同様に、電話の受け手とかけ手、記録係に分かれて、ロールプレイングをしながら適切な待遇表現を身に付けていくというものである。「聞くこと」の活動は、メタ認知により既知知識が引き出され「推測・確認・修正」が繰り返されていくと考えられ、「聞くこと」は「表意（相手発話の言語的な意味）の理解」と「推意（話し手の意図）の理解」からなるとする山元の考えとも関連する授業実践である。

演習のもう一つの柱として「能動的に『聞くこと』で理解を深める学習」を掲げた。一つ目は『聞くこと』で理解力を深める学習（1年4月）を行った。まず「水の東西」という題名から内容を推測し、対比に気を付けながら聞く学習である。若木常佳が示した「受信過程において組織すべき学習内容」の「補いながら聞く」「既知を関わらせる」「共通点や相違点を聞き分ける」「必要な情報を選択して聞く」力をつけさせることができる学習活動である。

二つ目として、『話すこと・聞くこと』で理解力を深める評論教材の学習（2年1月）を行った。「聞くこと」によって評論の内容を理解し、話し合いによってさらに理解を深めた。「聞くこと」を起点にして「読むこと」や「話すこと」の学習に繋がっていった。大村の「聞くこと」によって「本気で考えたこと」になるという説や山元の「相手の話について、不足点や妥当性、自分にとっての必要性等を考慮しながら聞く」「自分の意見と相手の意見、あるいは複数の意見を比較して共通点と相違点を捉える」という考えと関連した学習である。こうして評論の読解の授業に「聞くこと」を組み込んでいくことができた。リスニングテストのような「聞くこと」の取り立て指導と、「話すこと」「書くこと」「読むこと」の関連学習として「聞くこと」を取り入れた学習を織り交ぜながら実施することが望ましい。

第8章では、国語科で身に付けた「聞くこと」の能力を国語科以外の教科や学校行事において定着させることができると考え、「聞くこと」における他教科との関連も示した。国語科の授業で一旦身に付けた力を、他教科や学校行事において横断的に定着させることができた。

終章では研究の成果と課題、展望について述べた。研究した成果として、「①『聞くこと』の指導に関する実態と問題点の明確化」「②『聞くこと』の学習の捉えられ方、研究者の主張の整理」「③学習者の『聞くこと』の能力を育成する授業の開発」をあげた。

#### 4、研究の成果と今後の課題

本論文では、国語科における「聞くこと」の学習の捉えられ方、研究者の主張、教育現

場の実態を踏まえ、特に「聞くこと」の能力を向上させるための授業実践を目指してきた。そして、仮説として立てたように、「『聞くこと』を話すことから独立させて考えること」によって、能動的に「聞くこと」が重要であり、「聞くこと」の能力育成が思考力の向上に繋がるという面を顕在化できたと考える。まず前半の「『聞くこと』を『話すこと』から独立させること」については、国語リスニング評価テストにおいて「聞くこと」の能力に特化した学習に取り組むことができた。また、その他の授業実践においても、「聞くこと」の取り立て指導として実施することができた。それらの実践において、能動的・積極的に聞かなければインタビュー・面接演習・電話応対演習などの授業は成り立たないことが分かった。読解の授業も能動的に聞くか否かで理解力が大きく変わってくる。また、評論の学習の中に「聞くこと」を取り込むことによって、授業全体を通して生徒がしっかりと聞き、理解することができたことも、提出物の中のメモや定期テストの該当部分の点数からも明らかになった。

研究の具体的な成果として、以下の3点をあげた。

- ①「聞くこと」の指導に関する実態と問題点の明確化
- ②「聞くこと」の学習の捉えられ方、研究者の主張の整理
- ③学習者の「聞くこと」の能力を育成する授業の開発

このように、「聞くこと」を中心とした授業を行うことによって、成果を得られたことから、「聞くこと」の有用性を明らかにすることができたと考える。

一方、本研究の課題として評価の問題が大きく二つあげられる。一つ目は、「聞くこと」についての評価が難しいことである。第1章第1節でも述べたが、話し言葉の時間的線条性・即時性からどのように「聞くこと」ができたか提示しにくいことである。聞いたことは残りにくい。そこで、メモを積極的に取らせて、どのように聞いたかを再現させ、上手に取れたメモをクラスで共有できるように示した。これからは録音するなどして、メモから再現できる聞き取った内容と録音された元の音声とを照合し、どう聞き取れたかを評価できるようにしていきたい。

二つ目の課題として評価の在り方のことがあげられる。学習者自身がどのような能力をつけるための学習かを事前に把握し、学習後に自らの学習過程と学習成果を実感できるための評価を目指した。また、指導者が、自身の授業の修正に活かせるようにした。しかし、実際の授業の中では、演習の出来不出来を評価するに留まってしまう場合もあった。これまでの評価について、個人レベルだけでなく所属する高等学校の国語科全体で改めていく必要がある。さらに、各観点からの評価を統合したものが評定であるが、特に高等学校では大学の推薦入試で求められる評定平均ばかりが重視されがちである。こうした評価や評定の問題の改善にも取り組んでいくことが重要である。

本研究の展望としては「聞くこと」の能力を高めるためには、「聞くこと」を中心とした学習をおこない、「聞くこと」の指導の有用性を確認したうえで、授業を展開していく必要があると考える。例えば国語リスニング評価テストを行うなどして、「聞くこと」の能力



を高めつつ、取り立て指導としてインタビューや面接、電話応対、プレゼンテーション等の学習を取り入れることにより、社会的機能に重きを置いた「聞くこと」の能力を高めていくことである。

思考力を高めることに関しては、現状の学習活動の中でも重視されている「読むこと」の学習に「聞くこと」を積極的に盛り込むことで、「聞くこと」の学習の頻度を高めることができる。本研究で示した評論教材だけでなく、小説や古典の授業にも活かしていけると考える。一方、朗読や落語などを鑑賞し「楽しみながら聞く」というのも、大事な「聞くこと」の側面である。「楽しみながら聞く」というのは、高橋の言う「聞き浸る」（鑑賞的に聞く機能）である。こうした感情や生活を豊かにする「聞くこと」にも目を向けていきたい。